

## 三つの神学：サン＝プルサンのドウランドゥス による神学の分類をめぐって

上遠野 翔

### はじめに

本稿は、14世紀のドミニコ会神学者サン＝プルサンのドウランドゥスにより提示された神学の三分類と、それに対する同時代のドミニコ会の神学者ヘルヴェウス・ナターリスからの批判を通して、両者の神学の捉え方の差異を明らかにすることを目指すものである。

まず、ドウランドゥスとヘルヴェウスとの関係について、事件史的に整理する<sup>1</sup>。事の発端は、1307/8年頃にパリにてドウランドゥスの『命題集註解』の手稿が、本人の許可を得ずに外部に流出する事件が起きたことである。この最初の手稿（以下「A版」）は、ドミニコ会上層部により異端の危険がある学説やトマスの説に反する学説を含んでいるとされ、修正を余儀なくされる。この修正（以下「B版」）の後、ドウランドゥスはパリでの『命題集』講義を許されたものの、1313年の総会において改めて彼の著作に誤りや異端である点が含まれていないかを審査する委員会が組織され、翌1314年には彼のものとされる93箇条の項目が非難された。更に1316年には、再び彼の学説について、今度は明確にトマスの学説に反するかどうかを審査する委員会が組織され、翌1317年にはトマスに反する項目として235箇条もの項目が非難された。それに対しドウランドゥスは、アヴィニョンに移った後、リモー司教に叙任されドミニコ会の軛から逃れ、改めて自身の立場を最終的に示すものとして、三度目の『命題集註解』を著した（以下「C版」）<sup>2</sup>。

この二度の審査において指導的役割を担ったのが、ヘルヴェウス・ナターリスであった。彼は当時のドミニコ会全体を主導した神学者の一人であり、後にはドミニコ会総長としてトマス列聖に尽力した人物でもある。彼とドウラン

ドウスとの論争はこの審査と非難においてのみならず、自由討論や個別の反駁書によっても行われた。この論争は、外部に対するトマスの学説の擁護が行われていた受動的段階から、会全体でトマスの学説に従うことが決定され、トマスの権威化が加速した積極的段階への大きな転機の一つとして重要視されてきた<sup>3</sup>。

さて、本稿で扱うドゥラントゥスによる神学の三分類は、『命題集註解』第1巻序論の最初の問題である「神学は学知であるか」の正文の冒頭に提示されたものであり、ドゥラントゥスは神学のあり方についての全ての問題を、この分類に則って考察する。この三分類は、ドゥラントゥスによる神学のあり方についての考察において、神学をどのようなものと捉えて議論を行うかという基礎的な枠組みとして機能していると言えるだろう。

この三分類や個々の神学についての記述は、ドゥラントゥス自身の神学理解の分析において用いられ<sup>4</sup>、また当時の神学の捉え方の伝統を伝えるものとしても利用されてきた<sup>5</sup>。しかし、この三分類に対するヘルヴェウスによる批判の存在からは、この分類が当時において一般的なわけではなかったことが窺える。更にドゥラントゥスは、この三分類のうち、彼自身も「より一般的」と見なす神学の捉え方に対して懐疑的な態度を取っているが、この捉え方は、後に見るように、三分類の批判者であるヘルヴェウスが掲げるものに相当するものであった。Loweも指摘しているように、この三分類を巡る議論において既に、両者の神学の捉え方に対する立場の相違が見出されるのである<sup>6</sup>。

そこで本稿では、ドゥラントゥスによるこの三分類を単体で分析するのではなく、ドミニコ会における「一般的」な立場の代表としてのヘルヴェウスによる批判とを比較することで、この三分類に対する態度から見出される限りの両者の神学の捉え方の差異を明らかにすることを試みる<sup>7</sup>。

本稿は、以下の構成をとる。まず初めに、ドゥラントゥスによる神学の三分類の定義をまとめて紹介する。続いて、それに対するヘルヴェウスからの批判と、それに対応するC版で加筆されたドゥラントゥスの反論を比較し、両者の神学の捉え方の差異を明らかにする。その後、ドゥラントゥスが自ら「よ

り一般的」なものと認める神学に対してどのような態度を取っていたのかを分析し、最後に結論を示す。

## 1. 神学の三分類

ドゥランドゥスによる神学の三分類が最初に提示されるのは、上述の通り、『命題集註解』第1巻序論の第1問題「神学は学知であるか」の主文の冒頭においてである。続く「神学は一つであるか」「神学の主題は神であるか」「神学は観想的か実践的か」などの問題においても、彼はこの三分類に即して議論を進めている。この三分類は神学についての考察の基礎的な枠組みとして機能しているのである。

ドゥランドゥスが提示する神学の三分類は、以下の通りである。第一の神学のみ、B版とC版とで記述の仕方が異なっており、B版では、

一つの仕方では、それによって我々が、聖なる教えにおいて伝えられていることを、またそこにおいて伝えられているままに認識するハビトゥスを示すのに応じて〔受け取られる〕<sup>8</sup>

とあるところ、C版では、

一つの仕方では、それによってのみ、または主要に我々が聖書において語られていることに、またそこにおいて伝えられているままに同意するハビトゥスとして〔受け取られる〕<sup>9</sup>

となっている。一見して分かるように、B版では「認識する」、C版では「同意する」の語が使われている点に明白な違いが見出される。またもう一つ顕著な違いとして、B版においては「聖なる教え」であったのが、C版においては「聖書」に変えられていることが挙げられる。

どちらの版でも、ドウランドゥスはこの第一の神学を信仰と同一視されるものとする。というのも、「聖書において伝えられていることは神的権威によってしかそのように捉えられないが、それら〔＝聖書において伝えられていること〕に、すなわち神的権威によって伝えられているままに同意することは、信仰にのみ属する」からである<sup>10</sup>。この箇所において「同意する (assentire)」を用いることには、B版・C版共に変更はない。

なお Brown は、C版で加えられた「それによってのみ、または主要に」という表現をもって、この第一の神学がドウランドゥスにとって最も基礎的な神学的認識であったと主張し、特に「主要に」と加えたことは、ドウランドゥスが他の神学の存在の余地を残したことを反映しているとしている<sup>11</sup>。

次に、ドウランドゥスは二つ目の神学を、以下のように説明する。

第二に、神学は、それによって信仰と、聖書において語られている諸々のことが、我々にとってより知られている何らかの諸原理から、弁護され、宣明されるハビトゥスとして受け取られる<sup>12</sup>。

ドウランドゥスはこの定義を、アウグスティヌスの『三位一体論』第14巻を引用し裏付けた上で、ペトルス・ロンバルドゥスが『命題集』序論で論じているものもこの神学であるとする。また Brown はこの神学を、当時の神学に対する捉え方の一つの伝統に対応したものとし、ボナヴェントゥラにおいて既に見出されるとするほか、ペトルス・アウレオリヤ、ドウランドゥス自身をもこの伝統のうちに位置づけている<sup>13</sup>。

最後に、ドウランドゥスは三つ目の神学の分類を、以下のように提示する。

第三に、神学はより一般的に（それがより真であるかは分からないが）、諸結論が諸原理から〔演繹されるように〕、信仰箇条から、また聖書で言われていることから演繹される諸々のことのハビトゥスとして受け取られ、このあり方が今語る者たちの口において一般的に繰り返されているものであ

る<sup>14</sup>.

この「今語る者たちの口において一般的に繰り返されている」といった表現からは、この神学が少なくともドゥランドゥスの周囲、すなわちドミニコ会内では一般的なものとして掲げられていたことが窺える。実際、このような演繹的な神学の捉え方の代表として、Brownはトマスの名を挙げている<sup>15</sup>。一方で、「それがより真であるかは分からないが」といった表現からは、ドゥランドゥス自身はこれに対して一步距離を取った姿勢を取っているように思われる<sup>16</sup>。

Brownが示しているように、この分類が当時存在した神学の捉え方を或る程度反映していることは確かであろう。しかし、先述の通り、この分類そのものは、ヘルヴェウスによる批判の存在からも窺えるように、必ずしも一般的なものではなく、少なくともこの二人の間では、この分類自体について対立があった。次章では、ヘルヴェウスによるこの三分類への批判と、ドゥランドゥスがC版にて追加した反論を比較し、その差異を明らかにする。

## 2. ヘルヴェウスによる批判とドゥランドゥスの反論

### A. ヘルヴェウスによる神学の三分類の整理

ヘルヴェウスによる三分類批判が見出されるのは、彼がトマス擁護のために著した未完の著作 *Opinio de difficultatibus contra doctrinam fratris Thome (Defensa Doctrinae D. Thomae)* においてである(以下 *Opinio*)<sup>17</sup>。ドゥランドゥスの側からは、この批判に対するものと思われる反論が、『命題集註解』C版において加筆されている。本章では、ヘルヴェウスとドゥランドゥスとの比較のために、主にこの *Opinio* の該当箇所と、それに対応するC版での追加箇所を利用する。

ヘルヴェウスは *Opinio* において、「神学は信仰のハビトゥスから実在的に区別されたハビトゥスを示すか」という問題を設け、ドゥランドゥスのように神学を三つに分けることそのものに対する批判を行う<sup>18</sup>。その際、神学の三分類は以下のようにまとめられる<sup>19</sup>。

第一の神学は、「カノンのうちに措定されている諸々のことの知識であり、これは、彼らが言うには、信仰から事柄として区別されるものではない」とされる<sup>20</sup>。第二の神学は、「それによって誰かが、本性的に認識されたことから、何らか蓋然的なことまたは説得的なことを、信仰の弁護のために、またそれが蓋然的であることを示すために演繹することを知るところの、考案された何らかのハビトゥスが、神学と言われる」とまとめられる<sup>21</sup>。第三の神学は「それによって誰かが信仰箇条から、あるいは聖書において書かれた諸々のことから、これらのうちに暗黙裡に含まれている他の諸々のことを結論することを知るハビトゥスである。そしてこれは、彼らが言うには、より本来的にでなく神学と言われるものであり、少なくとも第一のものから事柄として区別されるものである」とされる<sup>22</sup>。

ここで注目すべき点は、ヘルヴェウスにおいては第二・第三の神学が、どちらも何かを演繹する・結論するものとして捉えられていることである。以下、その点を念頭に置いた上で、ヘルヴェウスの批判とそれに対応するドゥラウンドウスの反論を詳細に検討する。

## B. 第一の神学への批判と反論

まずヘルヴェウスは、信仰が、聖書の内容についての知識として第一の神学とされていることを批判する。彼は、厳密な意味での信仰のハビトゥスを「それによって誰かが、何らか神によって啓示され、他のものから演繹されたのではないことを信じるハビトゥス」とした上で、演繹されたことについてのハビトゥスは、神学としてそれと区別されるべきであるとする<sup>23</sup>。ヘルヴェウスのこの区別に従えば、聖書に書かれていることについての知識には、端的な啓示の内容に対する「信仰」と、そこから演繹されたことについての「神学」とが含まれている。したがって、聖書の内容についての知識を一括りに「神学」とすることは出来ない。ここでは、単に知識として「認識する」ことのみが注目され、その認識の内容の種類が演繹的か否かが問題となっている。いわばヘル

ヴェウスは神学を神学たらしめる条件のうちに、演繹的であることを含めているのである。

これに対応するドゥランドゥスの反論は、以下の通りである。神によって啓示されたことは、信仰によってのみ同意される。ところで、聖書において書かれている推論的なことは、人間の理性によって見出されたものとしてではなく、神によって啓示されたものとして書かれている。故に演繹的であるかどうかにかかわらず、それに対しては信仰がある<sup>24</sup>。ここからは、ドゥランドゥスの提示する第一の神学は、その内容が演繹的か否かにかかわらず、神によって啓示されたものとして同意が為されている限りにおいて、信仰による同意をもたらすものとしてまとめられたものであることが分かる。ここでは、信仰が単に「認識する」ためのものとしてではなく、「同意する」ためのものとして捉えられている。

C版では更に、信仰を神学と見なすことに対する、ヘルヴェウスのものとは別の批判への反論が為されている。この批判は、信仰は注がれた (*infusus*) ハビトゥスであるが、聖書において含まれていることを認識するためのハビトゥスは、学究と教えを通して獲得された (*acquisitus*) ハビトゥスであるから、神学と信仰は同じではない、というものである<sup>25</sup>。

ドゥランドゥスによる反論は、以下の通りである。確かに、何かを信じるためにはその信じられるところのものが提示され説明されていなければならない、それは本性的に知られるものではないから、その知識は学究または教えによる獲得を通じたものでなければならない。しかし、その知識はそれに同意する者にも同意しない者にも共通であり得るから、それとは別に、神によって啓示されたものとしてその知識に同意するために、注がれる信仰のハビトゥスが必要である。「聖書が神によって吹き込まれたものであると信じる者たちでなければ、〔聖書の内容に〕同意することはなく、そのことが信仰に属し、こうして信仰のみが、または主要に、聖書で言われていることへの同意をもたらす」のである<sup>26</sup>。故に、単に学究を通して聖書の内容を「認識する」だけのハビトゥスは、同意を欠いているために神学と言われるべきではない。そうではなくて、

ここで「第一の神学」としてドゥランドゥスが提示するものは、この「そののみが、または主要に」聖書の内容に対する同意をもたらすハビトゥスとしての信仰なのである。

以上を踏まえると、B版における第一の神学の規定における「認識する」が、C版において「同意する」に書き換えられているのは、単にそれを聖書についての知識として扱うこれらの批判に対して、この第一の神学が同意をもたらすものでなければならないという点をより強調するためであったと思われる。そうであるならば、「聖なる教え」が「聖書」に書き換えられているのも、この同意が与えられる対象が聖書の内容であるという点をより明確にするためであったとも考えられるだろう。

### C. 第二の神学への批判と反論

続いて、ヘルヴェウスによる第二の神学と第三の神学の区別に対する批判を検討する。ヘルヴェウスはまず、第二の神学を「説得的ハビトゥス (*habitus persuasivus*)」と呼び、それを神学の名で呼ぶこと自体を否定する。ヘルヴェウスによれば、それは神学そのものではなく、神学に接続された (*annexus*) 別のハビトゥスである<sup>27</sup>。学知と臆見的ハビトゥスは、同じ対象についてのものであっても区別され、二種類の学知とは言われず、後者は単に接続されたものとして考えられるようにである。

この批判は、ヘルヴェウスが第二の神学を、「本性的に認識されたことから、何らか蓋然的なことまたは説得的なことを、信仰の弁護と、それが蓋然的であることを示すために演繹する」ものと再定義したことに基づくと思われる。ヘルヴェウスは、第二の神学と第三の神学の違いを、弁明・宣明するものか演繹するものかという点ではなく、どちらも演繹的であることを前提とした上で、何を出発点として演繹を行うか、という点に置いているのである。その上で、ヘルヴェウスは本来的に神学と呼ばれるべきハビトゥスは第三の神学だけであるとし、「神学は、信仰箇条に属する第一に信じられることの信頼性のために、

信仰箇条に潜在的にかつ暗黙に含まれることについての信仰をもたらす何らかの信仰的で推論的なハビトゥスに他ならない」とし、それ以外のあり方を排除する<sup>28</sup>。つまり彼は、神学であるために必要な条件として、信仰箇条から出発する推論的・演繹的なハビトゥスであることを要求しているのである<sup>29</sup>。

ドゥランドゥスはC版で、このような批判に対し、この批判の内容を二つの場合分けして反論する<sup>30</sup>。第一に、この批判が「彼らが神学と呼ぶ、聖書を弁護するためのハビトゥスが、そのような〔本来的に言われた〕神学と異なるハビトゥスではないが、そこに結び付けられたもの (adiunctus) であると言おうとしている」場合である<sup>31</sup>。この場合、何かが何かに結び付けられるならば、それは互いに異なるものでなければならないのに、異なるものではないと言われている以上、矛盾が生じると反論が為される<sup>32</sup>。

一方、もう一つの場合分けでは、批判者は第二の神学は第三の神学と異なるハビトゥスであり、かつ第二の神学は主要なものではなく結び付けられたものであるから神学と言われるべきではないと言おうとしているとされる。これに対しドゥランドゥスは、批判者たちは別の箇所では「臆見は学知と両立しない」と主張しているにも関わらず、それが結びつくこと述べることで自己矛盾しており、またそもそも如何なる神学も信仰に基づくものである以上、学知としての確実性を有し得ないため、批判者が述べる学知と臆見的ハビトゥスの類比自体が成り立たないとする。

ここで注目に値するのは、この反論の結論部分にて、ドゥランドゥスが神学一般について彼自身の捉え方を提示している以下の箇所である。

よってまた如何なる〔学知〕にも神学の名は適用されず、同意をもたらす全ての認識的な神学的ハビトゥスにそれ〔＝神学の名〕は相応し、(...)我々がそれについて語っているところのハビトゥス〔＝第二の神学〕に最高度に相応する<sup>33</sup>。

ここでは、ドゥランドゥスは神学が演繹的であるかという点には全く触れてお

らず、「同意をもたらす認識的な神学的なハビトゥス」でありさえすれば、それが神学と呼ばれることが明確に述べられている。ここで提示されているのは、いわば神学であるために十分な条件であると言うことが出来よう<sup>34</sup>。同語反復的な「神学的な」という条件は、明確な定義づけはされていないが、信仰や聖書に基づく事柄に関するものであるという条件だと思われる。

この箇所を踏まえると、信仰と同一視される第一の神学は、聖なる教えないし聖書の内容に同意することをもたらすハビトゥスとして、この条件を満たすために「神学」として数えられていたことが分かる。一方、第二の神学は、この条件に沿う仕方で整理すれば、信仰と、聖書において語られている諸々のことに、弁護したり宣明したりすることで同意をもたらすハビトゥス、となる。

加えて、ドゥランドゥスはこの第二の神学として神学を受け取った場合、「信仰と神学とは、信仰が権威のみによって伝えることを神学は理性によって伝えるという点以外は、同じことについてのものである」とする<sup>35</sup>。これを踏まえて再び整理すると、第一の神学についても第二の神学についても、それによって同意が与えられるものは同じであり、両者の間では、何によって同意がもたらされるかのみが異なっていると言えるだろう。このことから、ドゥランドゥスはこの第一の神学と第二の神学については、それぞれが同意をもたらす仕方に基づいて区別をしていることが窺える<sup>36</sup>。

以上、ヘルヴェウスの批判に対するドゥランドゥスの応答から、ヘルヴェウスが信仰箇条や聖書から何らかの結論を導き出す演繹的なもののみを神学として認めていたのに対し、ドゥランドゥスは、聖書や信仰箇条の内容に「同意する」ことをもたらすものであることを神学にとって十分な条件と見なすことで、神学の名が適用される範囲を拡大していたことが明らかになった。とはいえ、ドゥランドゥスはヘルヴェウスが掲げる演繹的な神学の方が「より一般的」であることを認めていた。それでは、ドゥランドゥス自身はこの演繹的な神学を、どのように捉えていたのだろうか。

### 3. 第三の神学に対するドゥランドゥスの姿勢

ドゥランドゥスは「神学は学知であるか」という問題において、第三の演繹的な神学についてそれを問う前に、以下のように自身の立場を提示する。

先に言われたように、神学はより一般的にこのように受け取られているが、私はそれがより真であるのか、または本来的であるのかは知らない。私がこのように言うのは、或る者たちが信仰箇条から演繹されると言っていることは、むしろ真理に即しては信仰箇条を支えるため、または宣明するために挙げられているからである<sup>37</sup>。

ここからも、ドゥランドゥスが一般的にこのような神学が主に神学だとされていることを認めてはいるものの、彼自身はそれに懐疑的ないし否定的であったことは明白である。

ただし、彼はこの箇所でも、神学において、信仰箇条ないし聖書の内容から何らかの結論が得られること自体を否定しているわけではない。そうではなく、そのような演繹的な第三の神学を「一般的に」自分たちの神学として掲げる者たちが実際に行っているのは、むしろ第二の神学なのだと指摘している。例えば、三位一体についての推論を提示する時、神学者は「人間の理性に即しては極めて不明瞭な三位一体の信仰箇条が、可能なものとしてどうにか支持されるよう、信仰箇条を支持して言われることを挙げるのであり、信仰箇条から主に演繹するのではない」<sup>38</sup>。つまり彼は、たとえ演繹的推論を用いるとしても、そこにおいて主に目指されているのは結論を演繹することではなく、むしろ信仰される内容を支持したり、弁護したりすることであるとするのである。

一方でドゥランドゥスは、実践的なものに関しては、道徳的書物や説教におけるように、信仰箇条や聖書の箇所から何らかのことを演繹することを、第二の神学とは別の神学として認める<sup>39</sup>。つまり、「何を為すべきか」に関しては、それを結論すること自体を目指す演繹的神学があるとするのである。実際彼は

別の箇所においては明白に、この第三の神学を「実践的に信仰箇条と聖書に言われていることから何かが演繹されるハビトゥス」と呼んでいる<sup>40</sup>。

それを踏まえると、彼が第三の神学ではなく第二の神学であると主張しているものは、観想的なものに限定されていると思われる。実際、彼は別の箇所では、「私は〔信仰〕箇条から何らか本来的に観想的なものが演繹されるとは思わず、むしろそれは〔信仰〕箇条を宣明するために挙げられている」とし、観想的なものに限定して上と同様の批判を行っている<sup>41</sup>。こうしてドゥランドゥスは、実際に議論に用いる分類としては、観想的なものと同様のものとして実践的なものを分けて考えた上で、第三の神学としては観想的なものを認めず、実践的なもののみを認めたのである<sup>42</sup>。

以上のことから、ドゥランドゥスのこの第三の神学に対する態度は、次のように整理できる。まず、ドゥランドゥスは観想的なものも含めて、ヘルヴェウスのように神学を演繹的なものと捉えることが「より一般的」であることは認識しており、それを一つの捉え方として神学の分類のうちに数えていた。しかし、ヘルヴェウスが観想的なものであると実践的なものであると演繹的なものとして一つの神学とし、かつ神学をそれのみに限定していたのに対し、ドゥランドゥスは演繹的な神学のうち、観想的なものを実際には信仰される内容を支持したり、弁護したりすることを目指すものとして第二の神学に当たるものであるとし、実践的なもののみが結論の演繹そのものを目指すものとして第三の神学と認められるものとした。そうすることで、ドゥランドゥスは神学を一つにまとめずに、むしろ区別を導入したのである<sup>43</sup>。

## 結論

以上、ドゥランドゥスによる神学の三分類と、ヘルヴェウスによるその批判の比較を通して、以下の二点が明らかとなった。まず、信仰箇条や聖書から結論を演繹するものであることを神学に必要な条件とするヘルヴェウスに対し、ドゥランドゥスは「同意をもたらず認識的な神学的ハビトゥス」であるこ

とを神学にとって十分な条件とすることで、神学の名が適用される範囲を広く設定していた。こうして彼は、同意をもたらすという点に注目することで、信仰そのものをも第一の神学として数えたのである。

第二に、ヘルヴェウスがそのみを本来的な意味での神学として掲げ、ドゥランドゥスも「より一般的」なものと認めていた演繹的な神学に関しては、ドゥランドゥスは確かに神学の捉え方の一つとして認め、三分類の一つとして挙げている。しかし、自身の立場としては、彼は演繹的な神学としては実践的なもののみを認め、観想的なものに関しては第二の神学であると見なし、神学の間に区別を導入している。これは神学を観想的なものも実践的なものも含め、信仰箇条や聖書の内容を諸原理とする演繹的なものに限定し、一つにまとめたヘルヴェウスとは対照的である。

このように、神学のあり方を巡る議論において、ドゥランドゥスとヘルヴェウスの立場は、何を神学と見なすかという条件付けの時点で、大きく異なるものであった。ここからは、それぞれの神学が何を指すものであるかに注目し区別をもたらしたドゥランドゥスと、何を原理としどのような仕方で進行するかに注目し神学を一つにまとめたヘルヴェウスとの視点の違いをも読み取ることが出来るだろう。本稿では神学の三分類を巡る議論にのみ注目したが、彼らのこのような基礎的な枠組みや視点の違いは、神学を巡るそれ以外議論においても大きく反映されているものと思われる。

\*本研究は、JSPS 科研費 JP 21J12191 の助成を受け、中世哲学会第 71 回大会（2022 年 11 月 12 日）にて口頭報告を行った内容に、いただいた有益なコメントや批判をもとに修正を加えたものである。

## 註

- 1 両者の論争の歴史的背景について、J. Koch, *Durandus de S. Porciano O.P., Forschungen zum Streit um Thomas von Aquin zu Beginn des 14. Jahrhunderts*, Münster 1927; E. A. Lowe, *The*

*Contested Theological Authority of Thomas Aquinas: The Controversies between Hervaeus Natalis and Durandus of St. Pourçain*, New York 2003; I. Iribarren, *Durandus of St. Pourçain. A Dominican theologian in the shadow of Aquinas*, Oxford 2005 など参照。以下の整理は主に Iribarren, *op. cit.*, pp. 1–8; W. J. Courtenay, “Durand in His Educational and Intellectual Context”, A. Speer, F. Retucci, T. Jeschke & G. Guldentop (eds.), *Durand of Pourçain and His Sentences Commentary: Historical, Philosophical, and Theological Issues*, Leuven/Paris/Walpole, MA 2014, pp. 13–34 に基づく。

2 したがって彼の『命題集註解』には三つの版があるが、今回検討の対象となるドゥランドゥスの『命題集註解』第1巻は、写本の伝承が主に二種類しかない。片方はC版で確定しており、もう片方についてはA版かB版かについて論争があったが、最新の校訂版ではB版とされているため、本稿でもこれをB版として扱う。F. Retucci, “Selected Problems in Books I-II of Durand’s Sentences Commentary”, in: A. Speer, F. Retucci, T. Jeschke & G. Guldentops (eds.), *Durand of Saint-Pourçain and his Sentences commentary: historical, philosophical, and theological issues*, Leuven 2014, pp. 71–96. 使用するB版のテキストは Durandus de S. Porciano, *Scriptum super IV libros Sententiarum. Prologus et Distinctiones 1–3 libri Primi*, ed. G. Guldentops, Leuven/Paris/Bristol 2019 (以下 Durandus (B)). C版のテキストは D. Durandi a Sancto Porciano, *In Petro Lombardi Sententias Theologicas Commentariorum libri IIII*, Venezia 1571 (以下 Durandus (C)). なおC版については Thomas Institut による転写版も参照 (<https://durandus.uni-koeln.de/transkription-ed-ven-1571>; 最終閲覧 2023/11/29).

3 Lowe, *op. cit*; Iribarren, *op. cit.* ほか。トマスの権威化も含めたドミニコ会の教育全体の歴史における位置づけについては、M. Mulchahey, “*First the Bow is Bent in Study...*”: *Dominican education before 1350*, Toronto 1998, pp. 153–160; Y. Kajiwara, *Du frère au maître. Les Dominicains de France face au système universitaire des grades au Moyen Âge*, Paris 2022, pp. 361–362 参照。

4 S. F. Brown, “The Early Durand of Saint-Pourçain on the Scientific Character of Theology”, in: A. Speer, F. Retucci, T. Jeschke & G. Guldentops (eds.), *Durand of Saint-Pourçain and his Sentences commentary*, Leuven 2014, pp. 171–184; G. Emery, “Dieu, la foi et la théologie chez

Durand de Saint-Pourçain”, *Revue Thomiste* 99, 1999, pp. 659–699; P. Porro, “Tra l’oscurità della fede e il chiarore della visione: Il dibattito sullo statuto scientifico della teologia agli inizi del XIV secolo”, in: L. Bianchi & C. Crisciani (eds.), *Forme e oggetti della conoscenza nel XIV secolo: studi in ricordo di Maria Elena Reina*, Firenze 2014, pp. 195–256.

5 Id., “Declarative and Deductive Theology in the Early Fourteenth Century”, in: J. A. Aertsen, A. Speer (eds.), *Was ist Philosophie im Mittelalter?*, Berlin/New York 1998, pp. 648–655.

6 Lowe, *op. cit.*, pp. 100–103. ただし史料読解に問題がある。本稿註 16, 27 参照。

7 両者の神学理解全体の相違については Lowe, *op. cit.*, pp. 99–105; Iribarren, “Durand after the Censures. Theology as a Vocation”, in: A. Speer, F. Retucci, T. Jeschke & G. Guldentops (eds.), *Durand of Saint-Pourçain and his Sentences commentary*, Leuven 2014, pp. 35–55.

8 Durandus (B), p. 2, §4: “uno modo prout dicit habitum quo cognoscimus ea que in sacra doctrina traduntur et ut in ea traduntur...” なお、本稿を通して habitus の語を敢えて訳さず、「ハビトウス」とした。これは「習慣」「習態」などと訳されることもある語であるが、信仰の場合におけるように注文的なものを念頭に置いた場合、「習」という字が誤解を生じかねないと考えたためである。ここで用いられているハビトウスという語の一般的な意味としては、何らかの能力について、その能力が或る働きに対して善くまたは悪しく調整されている状態を指す。Cf. P. J. Hartman, “Durand of St.-Pourçain and Cognitive Habitus (*Sent. A/B III, d, 23, qq, 1-2*)”, J. Pelletier & M. Roques (eds.), *The Language of Thought in Late Medieval Philosophy: Essays in Honor of Claude Panaccio*, Berlin 2017, pp. 331–368, esp. 337.

9 Durandus (C), f. 2va, §6: “Vno modo pro habitu, quo solum uel principaliter assentimus his, quae in sacra scriptura traduntur, & prout in ea traduntur”. なお、これらの定義の後に、どちらの版でも「そしてこれは理に適っている (et hoc rationabiliter)」という短い文が添えられている。Brown はこれを、ドウランドウスにおける神学の合理的側面を示すものとしている。一方、Piché による C 版のフランス語訳では、これを「et c’est avec raison <que l’on prend le terme «théologie» en ce sens>」と訳し、この意味で「神学」の呼称を用いることについて「理に適っている」ことを示すものとしている。この直後に続く文では、この神学のあり方が神学と呼ばれるに値する理由が説明されており、一

方この第一の神学のあり方そのものが合理的であることの説明はどこにも見られないことを踏まえると、Piché に従う方が妥当であろう。Cf. Brown, “The Early Durand of Saint-Pourçain on the Scientific Character of Theology”, p. 172; D. Piché (tr.), Durand de Saint-Pourçain, *Commentaire des Sentences. Prologue*, Paris 2020, p. 141.

10 Durandus (C), f. 2va, §9: “quae in sacra scriptura traduntur, sic solum diuina autoritate sunt tenentur. Sic autem assentire eis scilicet ut diuina autoritate sunt tradita, solius fidei est.” なお B 版は in sacra scriptura ではなく in sacra doctrina である。

11 Brown, “Declarative Theology after Durandus: Its Re-presentation and Defense by Peter Aureoli”, in: S. F. Brown, T. Dewender & T. Kobusch (eds.), *Philosophical debates at Paris in the early fourteenth century*, Leiden 2009, p. 412.

12 Durandus (C), f. 2va, §7: “Secundo accipitur Theologia, pro habitu, quo fides, & ea quae in sacra scriptura traduntur, defenduntur, & declarantur, ex quibusdam principiis nobis notioribus.” なおこの scriptura は B 版・C 版に共通。

13 Brown, “Declarative Theology after Durandus”, pp. 405–421.

14 Durandus (C), f. 2va, §8: “Tertio accipitur theologia communius (nescio si verius) pro habitu eorum, quae deducuntur ex articulis fidei, & ex dictis sacrae scripturae, sicut conclusiones ex principiis: & hic modus nunc uertitur communiter in ore loquentium.”

15 Brown, “Declarative and Deductive Theology in the Early Fourteenth Century”, p. 649. ただし、トマスの神学理解がこのような神学に留まるものであるかは疑問である。

16 Lowe はここにドウランドウスの反トマス主義的姿勢が表れているものとし、「アリストテレス＝トマス主義」に対する「アウグスティヌス主義」的反動の一環と見なす。しかし、彼女がドウランドウスがトマスを名指しで非難しているとして挙げる箇所は、むしろドウランドウスが自身の主張がトマスの思想にも一致していることを示す箇所である。Cf. Lowe, *op. cit.*, p. 101.

17 テキストは P. Piccari(ed.), “La Opinio de difficultatibus contra doctrinam fratris Thomae di Erveo di Nédellec: Edizio critica”, *Memorie domenicane* Ser. NF 26, 1995, pp. 5–183 を使用 (以下 *Opinio*)。Olszewski によれば、執筆時期は 1308 年から 1311 年の間である (M. Olszewski, *The Dominican theology at the crossroads: critical edition and study of the prologues to the*

*Commentaries on Peter Lombards sentences by James of Metz and Hervaeus Natalis*, Münster 2010, p. 333). なお *Opinio* というタイトルは Piccari による。

18 なお、この批判はドウランドゥスを名指しで批判するものではなく、ヘルヴェウスは「或る者たち (*quidam*) はアウグスティヌスの区別を通してこう答えている」(*Opinio*, p. 45) とするのみである。

19 ヘルヴェウスの提示する順番は異なるが、比較のため順序はドウランドゥスに合わせる。

20 *Opinio*, p. 45: “quedam est que est noticia eorum que ponuntur in canone; et ista, ut dicunt, non distinguitur realiter a fide.”

21 *Ibid.*: “...dicitur theologia habitus quidam adinventus, quo ex naturaliter cognitis scit aliquis deducere aliqua probabilia vel persuasiva ad defensionem fidei et ad ostendendum ipsam esse probabilem.”

22 *Ibid.*: “Alia est theologia, que est habitus quo aliquis scit ex articulis fidei, sive ex hiis que sunt scripta in sacra scriptura, alia concludere que in istis implicite continentur. Et ista, ut dicunt, minus proprie dicitur theologia, saltem distincta realiter a prima...”

23 *Ibid.* ただし、広義に信仰を捉えた場合には、演繹されたことを信じることも信仰に含まれることを認める。 *Ibid.*, p. 46.

24 Durandus (C), f. 2vb, §15.

25 *Ibid.*, §13.

26 *Ibid.*, f. 3ra, §16: “... non assentiunt, nisi illi qui credunt sacran scripturam esse a Deo inspiratam: quod pertinet ad fidem: & ita fides aut solum, aut principaliter facit assentire dictis scripturae.”

27 *Opinio*, p. 47.

28 *Ibid.*: “theologia nichil aliud est quam quidam habitus creditivus discursivus faciens fidem de hiis que virtualiter et implicite in fidei articulis continentur propter credulitatem primorum creditorum, que sunt fidei articuli.” ただし、ここでヘルヴェウス自身も神学が信仰箇条に潜在的に暗黙に含まれることについての信仰をもたらすという点は認めており、知的ハビトゥスが一般に同意をもたらすものであることは前提としている。なお、Lowe

はヘルヴェウスはここでドウランドゥスが自分たちに帰した第三の神学に当たるあり方を否定し、それを「接続された」ハビトゥスと見なしているとしている。後に示すように、ドウランドゥスが第三の神学として実際に行われているのは第二の神学であるとしていることも踏まえるならば、そのように結論することも出来るが、Loweはその点には触れていない。Cf. Lowe, *op. cit.*, pp. 101–102.

29 ただし、ヘルヴェウスは神学においてドウランドゥスの主張する宣明的な側面があること自体を否定しているわけではない。彼は *Opinio* において、神学を推論的ハビトゥスであるとした上で、それが諸原理を説明するとしても、それは「第一の諸原理からそれらのうちに潜在的にかつ暗黙に含まれていることを演繹し結論することで、諸原理を説明することを有する」ことによってであるとしている (*Opinio*, p. 48: “deducendo scilicet et concludendo ex primis principiis ea quae virtualiter et implicite in ipsis continentur.”)。つまりヘルヴェウスにおいては、神学における宣明はあくまでも諸原理としての信仰箇条からの推論を通して行われるものであり、それ以外の仕方で行われるものは、本来の意味での神学ではないとして退けられるのである。この点についてはおそらく直接 1309 年のドウランドゥスへの非難の準備のために書かれたヘルヴェウスの *De articulis pertinentibus ad primum librum Sententiarum Durandi* においても同様に、宣明的な側面そのものが否定されるわけではないことが明言されている。Cf. T. Takada (ed.), “Die gegen Durandus gerichtete Streitschrift des Herveus Natalis «De articulis pertinentibus ad primum librum Sententiarum Durandi» (Art. 1-5)”, in: T. W. Köhler (ed.), *Sapientiae procerum amore*, Roma 1974, p. 441: “Sed verum est, quod in omni conclusione deductiva potest dici, quod declaratur principium quantum ad ea, quae continet implicite, in quantum per talem deductionem talia explicantur.”

30 Durandus (C), f. 3ra, §17–18.

31 *Ibid.*, f. 3ra, §17: “ille habitus defensivus sacre scripture, quem uocant Theologiam, non sit alius habitus a tali Theologia, sed sit ei adiunctus.”

32 ただし、ここで批判者が聖書を弁護するためのハビトゥスを神学と呼んでいるとしている点は、先のヘルヴェウスの批判とは一致しないように思われる。この点については、本稿註 35 参照。

33 *Ibid.*, f. 3ra, §18: “...nulli appropriatur nomen Theologiae, sed conuenit omnibus habitibus Theologicis cognitiuis facientibus assensum, & maxime illi habitui, de quo nunc loquimur...”

34 ドウランドゥスの神学理解の特徴をこの同意をもたらずハビトゥスという点に見出す先行研究として、Porro, *op. cit.*, pp. 233–246.

35 Durandus (C), f. 2vb, §10: “...fides & Theologia sunt de eodem: nisi quod illud, quod tradit fides sola autoritate, tradit Theologia ratione.”

36 第二の神学を最高度に神学の名に値するものと見なすことに関しては、第二の神学の規定におけるアウグスティヌス『三位一体論』第14巻からの引用が再び参照されている。

37 *Ibid.*, f. 5ra–b, §48: “...(ut dictum est prius) Theologia sumitur communius, nescio si uerius(*sic*), uel proprius: quod pro tanto dico, quia illa quae quidam dicunt deduci ex articulis, magis adducuntur secundum ueritatem ad sustinendum uel ad declarandum articulum.” B版には *proprius* の語はない。

38 *Ibid.*, f. 5rb, §48: “Vt ... articulus Trinitatis, qui secundum rationem humanam multum est obscurus, sustineatur aliquialiter, tanquam possibile, adducimus id, quod dictum est ad sustinendum articulum, & non deducimus principaliter ex articulo.” このことを踏まえれば、前章で挙げた第二の神学についての批判への反論における、「彼らが神学と呼ぶ、聖書を弁護するためのハビトゥス」という記述は、この指摘を先取りして示すもの、あるいはそれを反映したものと捉えることが出来る。

39 *Ibid.*: “Practice autem ex articulis multa deducuntur, & aliis dictis scripture...”

40 *Ibid.*, f. 8va, §5: “...pro habitu, quo practice deducuntur aliqua ex articulis fidei, & ex dictis sacrae scripture.” これはC版で追加されたものである。

41 *Ibid.*, f. 10rb§21: “...non uideo quod ex articulis aliquid proprie speculatiuum deducatur: sed potius ad articulum declarandum adducitur.”

42 なお、ドウランドゥスは学知が観想的であるか実践的であるかは、形相的には目的によって区別されるが、目的は対象の本性によって定まるため、根本的には主題によって決まるとしている。*Ibid.*, f. 10vb, §5–11ra, §7.

43 この点を踏まえると、ドウランドゥスのこの三分類のうち第二の神学は観想的

なもの、第三の神学は実践的なものとしても整理され得る。後の問題でも、「信仰を弁護し宣明する神学の働きは、真理の認識のみに存する」ため、第二の神学は観想的なものとしてされている (*Ibid.*, f. 11vb, §23)。このように神学を観想的なものとして実践的なものに分けることは、1317年の非難においても糾弾されている (J. Koch, *Kleine Schriften*, vol. 1, Roma 1973, p. 73: “Credo, contra Thomam p. 1 q. 1 a. 4, ubi dicit quod theologia una existens est speculativa et practica”). なおヘルヴェウスは神学は観想的でも実践的でもあるが、主要には観想的なものであるとする。Cf. *Opinio*, pp. 153–160.

## 文献表

### 〈一次文献〉

Durandus de S. Porciano, *In Petro Lombardi Sententias Theologicas Commentariorum libri IIII*, Venezia 1571 (digital transcript : <https://durandus.uni-koeln.de/transkription-ed-ven-1571>: 最終閲覧 2023/11/29) .

Id., *Scriptum super IV libros Sententiarum. Prologus et Distinctiones 1-3 libri Primi*, ed. G. Guldentops, Leuven/Paris/Bristol, 2019.

Piccari, P.(ed.), “La Opinio de difficultatibus contra doctrinam fratris Thomae di Erveo di Nédellec: Edizio critica“, *Memorie domenicane* Ser. NF 26, 1995, pp. 5–183.

Piché (tr.), Durand de Saint-Pourçain, *Commentaire des Sentences. Prologue*, Paris 2020.

Takada, T. (ed.), “Die gegen Durandus gerichtete Streitschrift des Herveus Natalis «De articulis pertinentibus ad primum librum Sententiarum Durandi» (Art. 1-5)”, in: T. W. Köhler (ed.), *Sapientiae procerum amore*, Roma 1974, pp. 439–455.

### 〈二次文献〉

Brown, S. F., “Declarative and Deductive Theology in the Early Fourteenth Century”, in: J. A. Aertsen, A. Speer (eds.), *Was ist Philosophie im Mittelalter?*, Berlin/New York 1998, pp. 648–655.

Id., “Declarative Theology after Durandus: Its Re-presentation and Defense by Peter Aureoli”, in: S. F. Brown, T. Dewender & T. Kobusch (eds.), *Philosophical debates at Paris*

- in the early fourteenth century*, Leiden 2009, pp. 401–422.
- Id., “The Early Durand of Saint-Pourçain on the Scientific Character of Theology”, in: A. Speer, F. Retucci, T. Jeschke & G. Guldentops (eds.), *Durand of Saint-Pourçain and his Sentences commentary: historical, philosophical, and theological issues*, Leuven 2014, pp. 171–184.
- Courtney, W. J., “Durand in His Educational and Intellectual Context”, A. Speer, F. Retucci, T. Jeschke & G. Guldentops (eds.), *Durand of Pourçain and His Sentences Commentary: Historical, Philosophical, and Theological Issues*, Leuven 2014, pp. 13–34
- Emery, G., “Dieu, la foi et la théologie chez Durand de Saint-Pourçain”, *Revue Thomiste* 99, 1999, pp. 659–699.
- Hartman, P. J., “Durand of St.-Pourçain and Cognitive Habitus (Sent. A/B III, d, 23, qq, 1-2)”, J. Pelletier & M. Roques (eds.), *The Language of Thought in Late Medieval Philosophy: Essays in Honor of Claude Panaccio*, Berlin 2017, pp. 331–368.
- Iribarren, I., *Durandus of St. Pourçain. A Dominican theologian in the shadow of Aquinas*, Oxford 2005.
- Ead., “Durand after the Censures. Theology as a Vocation”, in: A. Speer, F. Retucci, T. Jeschke & G. Guldentops (eds.), *Durand of Saint-Pourçain and his Sentences commentary: historical, philosophical, and theological issues*, Leuven 2014, pp. 35–55.
- Kajiwara, Y., *Du frère au maître. Les Dominicains de France face au système universitaire des grades au Moyen Âge*, Paris 2022.
- Koch, J., *Durandus de S. Porciano O.P., Forschungen zum Streit um Thomas von Aquin zu Beginn des 14. Jahrhunderts. I Teil Literaturgeschichtliche Grundlegung*, Münster 1927.
- Id., *Kleine Schriften*, vol. 1, Roma 1973, p. 73.
- Lowe, E. A., *The Contested Theological Authority of Thomas Aquinas: The Controversies between Hervaeus Natalis and Durandus of St. Pourçain*, New York 2003.
- Mulchahey, M., “*First the Bow is Bent in Study...*”: *Dominican education before 1350*, Toronto 1998.
- Olszewski, M., *The Dominican theology at the crossroads: critical edition and study of the pro-*

*logues to the Commentaries on Peter Lombard's sentences by James of Metz and Hervaeus Natalis*, Münster 2010.

Porro, P., "Tra l'oscurità della fede e il chiarore della visione: Il dibattito sullo statuto scientifico della teologia agli inizi del XIV secolo", L. Bianchi & C. Crisciani (eds.), *Forme e oggetti della conoscenza nel XIV secolo: studi in ricordo di Maria Elena Reina*, Firenze 2014, pp. 195–256.

Retucci, F., "Selected Problems in Books I-II of Durand's Sentences Commentary", in: A. Speer, F. Retucci, T. Jeschke & G. Guldentops (eds.), *Durand of Saint-Pourçain and his Sentences commentary: historical, philosophical, and theological issues*, Leuven 2014, pp. 71–96.